「サモトラケのニケ」は、サモトラケ島 (現在のサモトラキ島)で発掘され、現在はルーヴル美術館に所蔵されている勝利の女神ニケの彫像である。

ルーブルのサモトラケの二ケ現存するギリシャ文明の彫像の中で、女神二ケを題材にした ものとして貴重な彫像でもある。

その題材のみならず、優美でダイナミックな姿や翼を広げた女性という特徴的なモチーフなどが印象的で、各地にレプリカが作られ親しまれている。

大理石製で高さは 328cm。紀元前 2 世紀頃の作であり、紀元前 190 年、シリアのアンティオコス 3 世との海戦に勝利したロードス島の人々がそれを祝ったものとする説がある。また、逆風を受けて船の舳先に立っていたとされる。

最初の発見は 1863 年で、フランス領事シャルル・シャンポワーゾによって胴体部分が見つかった。それに続いて断片と化した翼が見つかった。断片は全部で 118 片にのぼる。その後復元された像は 1884 年にルーヴル美術館の『ダリュの階段踊り場』に展示され、現在に至る。

右腕は 1950 年に発見され、ルーヴル美術館に保管されている。手は大きく広げられている。

日本にあるレプリカ

美ヶ原高原美術館(長野県小県郡武石村)

JR 奈良駅

鳥取県立米子東高等学校

ルーブル彫刻美術館(三重県一志郡白山町)

多摩美術大学(東京都八王子市鑓水)

ミロのヴィーナス(the Venus of Milo)は古代ギリシアの彫刻。ギリシア神話におけるアフロディテの像とされている。「ミロ」は発見地メロス島の英語風名称で、「ヴィーナス」はアフロディテのラテン語名ウェヌス(Venus)を英語風に読んだものである。高さはは203cm。材質は大理石。紀元前130年頃にAlexandros of Antioch によって作成されたと考えられている。

ミロのヴィーナスは 1820 年に小作農であったヨルゴス (Yorgos)によってエーゲ海のメロス島で発見された。かれは最初官吏に見付からぬようにヴィーナス像を隠していたが、トルコ人の官吏に発見され没収された。後に海軍提督ジュール・デュモン・デュルヴィル(Jules Dumont d'Urville)はこの像を見て価値を認め、フランス大使に頼みこんでトルコ政府から買い上げた。これは修復された後にルイ 18 世に献上された。ルイ 18 世はこれをルーヴル美術館に寄付し、現在でもそこで管理されている。

ダビデ (ヘブライ語 אור ;D w d ダーウィーズ, アラビア語 Arabic داود D I d, 在位前 1000 年 - 前 961 年頃)

古代イスラエルの2代目の王で、旧約聖書の『サムエル記』『列王記』に登場する。

ベツレヘムにすむエッサイの8番目の息子かつ末っ子として生まれ、羊飼いをしていたが、 サムエルに見出されて油を注がれる。彼は竪琴の名手であったため、精神を病み始めたサ ウルに仕えるようになる。ペリシテ人の戦士ゴリアテを倒したことで有名になり、その後 も戦功をあげていくがその人気をサウルにねたまれ、命を狙われる。サウルはダビデ殺害 の命令を出すが、ダビデの友人であったサウルの息子ヨナタンの手助けで逃亡する。

サウルはアマレク人を滅ぼし尽くせという神の命令に従わなかったため、神の恩寵を失う。 サウルはペリシテ人との戦いで息子たちと共に戦死した。

ダビデはユダの王となるとサウルの家来の軍勢と戦って勝ち、やがてイスラエルの王となった。ダビデはペリシテ人との戦いを続け、エルサレムを確保して、神の箱を運びあげた。

ダビデは家臣ウリヤの妻、バト・シェバを見初め、彼女を妻にするため謀略によってウリヤを戦死させる。預言者ナタンにとがめられてダビデも後悔するが、神はこれを許さず、バト・シェバから生まれた子供の命を奪った。次にバト・シェバから生まれた子供がソロモンである。その後、息子アブサロムの反乱では一時エルサレムを追われる。ダビデはなんとかアブサロムの反乱を納めるが、アブサロムはダビデの意に反して殺害された。

ダビデは四十年王位にあり、最後に息子のソロモンを次の王にたてて、この世を去った。

バビロン捕囚以後、救世主(メシア)待望が強まると、イスラエルを救うメシアはダビデの子孫から出ると信じられるようになった。新約聖書では、イエス・キリストはしばしば「ダビデの子」と言及される。

ダビデの像は幾つも造られているが、中でもミケランジェロによる作品は傑作と呼ばれ高い評価を受けている芸術作品である。

現在のイスラエルの国旗にも取り入れられている六芒星のマークはダビデの星とも呼ばれる。

地獄の門(じごくのもん)は、13-14 世紀イタリアの詩人、ダンテ・アリギエーリの叙事詩『神曲』地獄篇第3歌に登場する地獄への入口の門である。

「この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ」の銘文でよく知られており、深い絶望をあらわす表現としても用いられる。

なお、オーギュスト・ロダンの未完の作品に、「地獄の門」の巨大なブロンズ像がある。「考える人」はこの門を構成する群像の一つとして造られたもので、単体作品としても独立して高く評価されている。このロダン作「地獄の門」は、上野恩賜公園の国立西洋美術館をはじめ、世界に7つが展示されている。

[編集]

地獄の門の碑銘

『神曲』地獄篇は、作者にして主人公のダンテが古代ローマの詩人ウェルギリウスに導かれて、地獄を巡るという内容である。「地獄の門」は、この地獄の入口にかかる門であり、『神曲』地獄篇第3 歌の冒頭は、門の頂に記された銘文から始まっている。(和訳は山川丙三郎訳より)

Per me si va ne la città dolente, per me si va ne l'etterno dolore, per me si va tra la perduta gente. Giustizia mosse il mio alto fattore; fecemi la divina podestate, la somma sapïenza e 'l primo amore. Dinanzi a me non fuor cose create se non etterne, e io etterno duro. Lasciate ogne speranza, voi ch'intrate'

我を過ぐれば憂ひの都あり、 我を過ぐれば永遠の苦患あり、 我を過ぐれば滅亡の民あり 義は尊きわが造り主を動かし、 聖なる威力、比類なき智慧、 第一の愛我を造れり 永遠の物のほか物として我よりさきに 造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、 汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ

地獄の門の銘文は、門自身が一人称で語りかける形となっており、いわば門の自己紹介であると同時に地獄の紹介ともなっている。

始めの三行で反復されていることは、この門をくぐる者がこれから行くことになる地獄界のことを指している。すなわち、地獄界と、そこで繰り広げられる永劫の罰、そして地獄の住人のことを端的に言い表しているのである。

また、次の三行では、地獄が三位一体の神(聖なる威力、比類なき智慧、第一の愛)の創造によるものであることを示しており、始めの三行が反復しているのは、次の三行で象徴されている「三位一体」の神学に対応しているものである。

この門の碑文自体も、三行連句が三連に連なっている。そして地獄篇も冒頭の序を除けば33 歌から成り、『神曲』自体はおのおの33 歌から成る地獄篇・煉獄篇・天国篇の三部から構成されている(地獄篇は34 歌だが、巻頭第一歌は総序となっている)。このように「3」という数は、三位一体を象徴する聖なる数として、『神曲』の構成全体に貫かれており、極めて均整のとれた幾何学的構成美を見せている。(神曲の項を参照)

平櫛田中(ひらくし又はひらぐしでんちゅう、1872年2月23日(明治5年1月15日) - 1979年(昭和54年)12月30日)は岡山県出身の彫刻家。本名は平櫛倬太郎。旧姓は田中で、後に福山の平櫛家の養子になったが、旧姓を通称に用いていた。文化勲章受賞。

写実的な作風で、高村光雲、萩原守衛、朝倉文夫などと並び、日本近代を代表する彫刻家の一人。第二次世界大戦後は東京藝術大学の教壇に立つ。100歳を超え長命であったが、死の直前まで創作を続けた。

代表作は国立劇場にある「鏡獅子」。出身地の岡山県井原市に井原市立田中美術館、晩年 を過ごした東京都小平市には平櫛田中館があり、作品を公開している。

ダダイスムとは、1910 年代半ばに起こった芸術思想・芸術運動のことである。単にダダとも。第一次世界大戦に対する抵抗やそれによってもたらされた虚無を根底に持っており、 既成の秩序や常識に対する、否定、攻撃、破壊といった思想を大きな特徴とする。ダダイスムに属する芸術家たちをダダイストとよぶ。

高村 光太郎 (たかむら こうたろう、1883 年 3 月 13 日 - 1956 年 4 月 2 日) は彫刻家。 東京都出身。本名は光太郎と書いて「みつたろう」。彫刻家の高村光雲の長男。東京美術 学校(現・東京藝術大学)彫刻科卒業。

彫刻以外にも絵画や詩等でもいかんなく才能を発揮。『智恵子抄』等の詩集が有名になり 教科書にも掲載されるようになったため詩人として認識されることも多い。

1906 年に彫刻を学ぶためニューヨークに留学。その後ロンドン、パリに渡り 1909 年に帰国。 1912 年駒込にアトリエを建てる。この年、岸田劉生らと結成した第一回ヒュウザン会展に油絵を出品。 1914 年に詩集『道程』を出版。同年、長沼千恵子と結婚。1929 年に千恵子の実家が破産、この頃から千恵子の健康状態が悪くなり後に精神に異常をきたす。 1937 年千恵子と死別。1941 年に詩集『智恵子抄』を出版。 1945 年 4 月の空襲によりアトリエとともに多くの彫刻やデッサンが消失した。五月、岩手県花巻町(現在の花巻市)

の宮沢清六方に疎開。 1956年に結核のため死去。

ムーア 1898 イギリスのヨークシャー州に生まれる。師範学校後、第一次世界大戦に志願兵として入隊。その後、ロンドン王立美術学校に。

1928 ロンドンにて初めての個展

1931 ハンブルグ美術館が作品購入。抽象的作品を制作

ジャンアルプ 1886 アルザスの首都ストラスブールで葉巻工場経営の課程に生まれる。父はドイツ語、母はフランス語を話す(ストラスブールは当時、フランスとプロイセン戦争でドイツに割譲されており、第一次世界大戦後に再びフランス領となる)。ストラスブール技芸学校、その後、ワイマール美術アカデミーにて学ぶ。その後、家族でスイスに移住ジャン・アルプは、より熾烈な言葉でより踏み込んだ証言をします。

「これらの仕事は、線、表面、フォルム、色彩で構築されたものである。永遠へ、人間を超えた不可知のものへ近づこうとしているものだ。嫌悪をもってエゴチスムから遠ざかるものだ。人間の唾棄すべき低劣さを憎み、形姿を、絵画を憎むものだ。ギリシアの幻像的な彫刻、ルネサンスの幻像的な絵画は、人間の本性を過大評価させ、人間を分離と不和に導く。……再現とは偽造だ。……芸術とは真実であり、共有の真実は、個別性を超えてひとつの光明となるべきものである」 (小川栄二 「生成するフォルムの狩人 展覧会アルプ展」 『美術手帖 1985 年 10 月号』 p172)

ブランクーシが到達した単純化された形態表現が意味するもの...

「単純さは、芸術の目的ではない。しかし、事物のリアルな感覚に接近してゆくと、知らず知らずに単純さに到達するのである。単純さは、その底に複雑さを秘め、その意義を理解すためには、その本質によって人は成長しなくてはならない」(ブラマー画廊での個展カタログ、ニューヨーク、1926年) 8

「『私がしていることのすべては、形態の探究なのです』 『 < ビフテキ > (実物にもとづくアカデミックな作品のこと)をつくることはできます』。『でもそれは 1907 年にまるごと捨ててしまったのです。墓地に祈っている女性をつくるように頼まれたとき、その主題を形態へと単純化したのです』」 Russell Warren Howe, "The Man Who Doesn't Like Michelangelo," Apollo 49(May 1949):124. 7

「私はひざまずいた女性のかたちと『祈る人』という観念を追及し、ようやくそれに到達した。私自身の道を見出して、救われた思いだった。正確な(対象)の模倣は屍体をうむだけである。私のこの作品を抽象ということは馬鹿げている。それがいかに抽象的な性格をもっていようとも、それはきわめてリアルなのだ。リアリティというのは外形ではなく

観念のことであり、事物の本質のことなのである」 Brancusi, in Claire Gilles Guilbert, "Propos de Brancusi," Prisme des arts 12(December 1957):5-7 6

自作の「空間の鳥」「魚」シリーズなどについての解説ともなるもの...

「あなたが魚を眺めるとき、あなたはそのウロコに注意はしない。そうではないでしょうか。あなたは水面下のその動き、その遊泳、その肉体のきらめきを考える…そうです。私が表現したいと思うのはこれなのです。もし私がそのヒレ、目玉、ウロコを再現するとすれば、私は動きを殺してしまい、現実のパターン、あるいはその外観を得たことにしかなりません。私がとらえたいのはその精神のきらめきなのです」 Bracusi, in Malvina Hoffman,Sculpture Inside and Out(New York: W.W.Norton and Co.,1939),p.52 4

「鳥の高さは、それ自体では何も物語らない。肝心かなめなのは、対象の内的なプロポーションである。最近作の鳥をみても、相互の差は、写真ではほとんど見分けられないだろう。けれども、それぞれは新たな霊感によるものであり、前のものとは別のものなのである」 Burancusi, ibid.,p.115 3

ボッチョーニ イタリア未来派の画家たちが取り上げるモチーフは、上記の宣言の中に現れている主旨を具現化するものとして明白であるので、ここでは画題の意味を探ることはしません。未来派の画家たちが目指したものは、「スピード」「運動」、そしてそこから生まれる「ダイナミスム」を獲得するための新しい表現。

未来派絵画技術宣言でも、そのことは取り上げられています。

「すべてのものが運動し、走り、素早く変容していく。そして輪郭はわれわれの現前にとどまることなく、絶え間なく顕われては消える。身ぶりはもはやかつての一般的なダイナミズムが所有していた凍りついた運動ではなく、ダイナミックな感覚そのものなのである」(「絵画技術宣言」 イタリア未来派と諸外国の未来派展の未来派事典 / Germano Celant, Ester Coen, Enrico Crispolti, Gabriella Di Millia, Serge Fauchereau, Franco Maffina, Piero Pacini, Claudia Salaris, Gerald Silk, Mario Verdone / 「メディアの献立」 『美術手帖 1986年 12月号 特集:未来派 疾風のアヴァンギャルド』に所収 p84)